1　留学生と野宿の一週間

栗原明子

萬代橋（県庁が橋を渡ったところにありましたので、県庁橋と呼んでいました。）の近くに私の家がありました。爆心地から九〇〇ｍのところです。戦前は姉達二人が、よくこの川で泳いでいました。泳げない私は上から眺めるだけでした。戦争が始まると同時に、誰も泳がなくなりました。四人姉妹だったのですが、姉達二人は次々と嫁いでいき、残された私と妹は二人で夕方になると、その橋の上に涼みに行きました。

昭和一九年頃から、橋の近くの土手で外国の若い男性の方々が、浴衣を着たりして外でふざけたりして夕涼みしたり（広島は夕方になると独特の夕凪と云って、ちっとも風が吹かなくなります）、遊んでいらっしゃるのが目につく様になりました。何故、外国人があんな所にいらっしゃるのだろうかと不思議に思い、母に聞いてみますと、あれは南方特別留学生と云って、東南アジアから日本に連れてこられた人達で、良い家柄、頭の良い方達が選ばれて、その人達にとっては日本に来ることは、とても名誉なことなのだと、広島文理科大学で勉強して、将来母国に帰った後、その地域の指導者になって日本に協力させることを狙いとして使われるらしいと聞きました（東南アジア諸地域から二〇〇名近くの若い男性、二〇才前後の方達、日本に来られてからは、日本各県の大学に分散して教育を受けておられました。たまたま広島文理科大学に来られた方々が運悪く原爆に遭われました）。

興南寮と云って、その人達の為に学校から作られた寮、そこから文理科大学に通っておられると教えてくれました。でも側に寄ってはいけないと云われました。その当時（戦争中）は男の人と一緒に歩いてもいけない、話をし

てもいけない、たとえ兄妹であっても一緒に歩いてはいけない時代でした。
　でも私は不思議でした。この戦争中、食料も衣類も何もかも不足しているのに何故外国人を、わざわざ日本に連れてきて勉強させるのか、疑問だらけでした。その外国人は、広島だけではなく、色々な県に分散して、その地で皆さん大学に通うと云うのです。戦争も激しくなり、日本の男子学生は兵隊に、女子生徒は勤労奉仕に出る様になりましたし、日本のアチコチが空襲されるようになりました。B29の飛行機の不気味な音を覚えてしまう程だったし、その度に警戒警報、次に空襲警報が鳴り、とても怖く思いました。妹はその警報が不気味に鳴る度に押し入れに入り、食事も碌々摂れなくなり、安佐郡久地村の知人を頼って疎開をしました。日本は戦争を仕掛けた頃はとても強く、「勝った、勝った」というニュースをラジオで聞いては、提灯行列や旗行列をして、街をねり歩き、市民の皆はとても喜びました。日本が空襲される様になり、戦局は危うい方向になっていましたが、それでも尚、神風を信じて決して負けることはないと思っていました。洗脳とは本当に恐ろしいことです。本当のことは知らされていませんでした。

　八月六日の朝、お天気も良く、空は真青でした。その時は広島に爆弾が落とされるなんて、それも人類初の原子爆弾なんて、夢にも思いませんでした。ましてや橋の袂で、夕方になると夕涼みしていた留学生達と一緒に、一週間も野宿するなんて想像だにできないことでした。普通だったら有り得ないことです。
　広島の街は一瞬にして様変わりしていました。東洋工業で鉄砲の部品を作っていた私は、広島駅迄歩いて出ましたが心臓が止まりそうでした。はるか彼方迄何もありません。焼けた臭いと何とも云えない臭いがただよっています。ここからどうやって大手町の自宅まで帰ればいいのでしょうか。父はどうしているのでしょうか。道も何も分かりません。まだ火の残っているところもありますし、死体、怪我や火傷で男女の区別の分からない様な人、人間

はあまりのショックを受けると、精神状態も異常になるのでしょうか。平気で死んだ人をまたぎ、「水、水」と云っておられるのに、風説で水を与えると早く死んでしまうと云うことが頭の中にあり、それを無視して瓦礫の中を、道も分からない様なところを必死な思いで父を探し求め、土はまだ熱く革靴の裏を通して足の裏が火傷しそうでした。

昨日のお昼のお弁当を父と一緒に食べようと探し歩きましたが、暑い日中、とっくに腐敗していたことでしょう。日赤病院迄たどり着いたときには、もう疲れ果て、夕方になっていたので、今夜は一人でどこに寝たらいいのだろうかと、昨夜から一睡もしてなく何も食べてなく倒れる寸前に、神様は救って下さいました。日赤病院の前には広島文理科大学があります。その方に行きかけた時に、ちょうど一級上のSさんに出会いました。明子ちゃんじゃないと声を掛けて下さり、Sさんと二人で抱き合って泣きました。Sさんも昨夜は一人で野宿して、先程文理科大学の中に留学生や寮の持主の方々と一緒にいると云うことで、私もその中に誘って下さった時の嬉しさは忘れることができません。一秒でも違っていたら会えなかったのにと神様に感謝したことでした。Sさんは寮の持主のお嬢さんと同級生だったので、時々は寮にも遊びに行っておられ、留学生とはもう顔見知りだったようです。私はその人達に紹介され、すぐに明子、明子と可愛がって下さいました。もう怖くないから大丈夫だよと云って、何かと気を遣って下さり、安心と同時に倒れそうになりました。

暗くなりかけ、夕食は広大の校庭にも甘藷（さつまいも）が植えてあり、未だ収穫の時期ではないので親指程度にしか大きくなっていませんでした。その当時は、空地があれば何でも食べられるものを植えていました。広大の校庭もそうでした。でもそれを掘り、鉄カブトに入れ茹でて皆で少しずつ分けあって食べました。小さいなりにお芋の甘い味がし、昨夜から何も食べていない私には、美味しくとても御馳走でした。水はいたるところ水道管が破裂し、その側に人の死体があっても平気で飲んでいました。夜は本館の前の土の上で丸く輪になり、留学生や私達

が昨日、今日の怖かった話をしたり、何の爆弾だったのだろうか、新型爆弾かもしれないと話したり、持って逃げた写真帳を見せて下さったり、お国の話をして下さったり、サガラさんが持って逃げられたバイオリンを弾いて下さったり、お国の歌のブンガワンソロやラササヤンゲ等を歌って下さり、私達女性は賛美歌や日本の歌、桜々や童謡を歌ったりしました。その間も、寮の持主のお嬢さんのTさんは咳込んだりして、とても胸が苦しそうで、Sさんが一生懸命で彼女の背中をさすってあげ、きっとガスにやられたのだろうと話していました。彼等留学生は日本を悪く云う方は一人もいらっしゃいませんでした。それどころか、異国から来られ大変な目にあっていらっしゃるのに、私達がお慰めしなければなりませんのに全く反対に私達日本人が慰めて頂きました。

私は神様に友や寝る場所を与えられて、感謝と共にすっかり安心してしまいました。土の上に皆で寝転んで空を見上げますと、とても綺麗な星が瞬いて、地上でのことは何も知らないかの様に、私達を慰めるために輝いているかの様でした。

翌八日にはもう食糧もなくなり、私は自分の家の防空壕に食糧を埋めている事を思い出しました。防空壕の中だから多分大丈夫と思い、彼等に話すと、掘りに行ってみようと云う事になりました。彼等はどこから探してきたのかシャベルを二、三本持ってきました。彼等は何でも探してくるのが上手でした。大手町七丁目（現在は四丁目になっています）の我が家に向かいました。皆食糧が出てくると思って、元気に出かけましたが、現地に行き掘ってみましたが、缶詰は真黒になり、缶はへこんで中でカサカサと云う音、また一升瓶（現在一・八L瓶）の中に入れておいたお米は、ガラスが高熱のため溶けていました。茶釜に入れておいたものも、鉄でできているので大丈夫と思いましたが、その中も全部焼けて駄目だったので、余程の熱だったのだなと思いました。皆ががっかりして、その場に座り込んでしまいました。

そこへ私の母が来合わせて、汚れた姿をした私が異国人と一緒にいたので、びっくりしていました。母は妹の疎

開先に行っているので大丈夫と思い、母のことは少しも考えもせず、心配もしていませんでした。父を探さなければと云う思いのみでした。母は私達から何の知らせもなく、広島は大変な事になっていると聞き、心配して久地村から四十㎞の道のりを一日かけて、自分の家の焼跡迄たどり着いたのでした。これも不思議なことで神様がここで会う様に、母を導いて下さったのだと感謝いたしました。それでなかったら、母と私は会えなかったのかもしれません。

Ｓさんも御自分の家の焼跡でお母様と出会われ、共にその晩から留学生の仲間に加わり、賑やかになりました。両方の母のことをお母さん、お母さんと呼んで、故国のお母さんのことをしのばれたのだと思います。その日の夕食は、母が私と父に食べさせようと持ってきた僅かな食糧とお芋を皆で分けあって食べました。南方留学生だけではなく、中国からの留学生も何人かいらっしゃった様ですが、私のお見掛けした中国の方は、朱定裕さん、薫永増さんのお二人で、二人ともお怪我をされて苦しそうに、本館の入口に蹲っておられましたが、そのうちどなたかに引き取られていらっしゃった様子で、お姿をみかけなくなりました。私はユソフさんから血のついたレインコートを頂きましたが、女性物だったので、多分中国の留学生の中に、女性の方がいらっしゃったのだと思います。

朝になりますと、僅かな食糧と水を飲み、Ｓさんとお母様は妹さんの消息を尋ねて、私と母とは父を探しに出かけました。私達が出かけたあとでは、どこかで乾パンを配っているとか、おにぎりを配っているという情報を聞いては、彼等は並んで持って帰って下さいました。医療品もどこからか手に入れ、寮の四人の手当をしたり、特にお婆さまと奥様の二人が骨折をしていらっしゃり、とてもひどくて、傷の上をすぐに蛆虫が這っていましたのを丁寧に取り、包帯を巻き替えたりしておられました。彼等は皆で分担を決め、食糧係りとか、怪我人の救助とか、とてもよく働かれたそうです。寮の方々の手当とか、牛田の親戚の家に大八車に乗せて連れて行ったりと、寮の一家をとてもよく支えられました。

火傷や怪我が暑さで腐敗しはじめ、その傷に蠅がたかり、卵を産みつけ蛆虫がウヨウヨと這っていました。何故蠅や蚊は死ななかったのか、或いは周辺に残っていたものが異常発生したのか。蠅と蚊に悩まされました。避難所をあちこち父の姿を求めて歩き廻りましたが、父の姿はどこにも見つかりませんでした。母と二人トボトボと広大(ひろだい)に帰りますと、彼等はすぐに、明子、どうだった、見つけることができたか、と優しく聞いてくれました。見つからなかったと云うと、明日もあるから元気を出すんだよと云ってくれ、明るく接して下さり、疲れも癒される様でした。

そんな日を一週間も続けた時、彼等に帰国命令が出て、広大(ひろだい)での彼等との校庭での生活も終わりの時がやってきました。彼等も二十歳前後で、私達も同じ様な年頃だったので、本館の屋上に出て、よくそこで談笑したり、歌ったりしました。あの悲惨な中で楽しかったと云うのはいけない事かもしれませんが、一時の心の慰めでした。でも、屋上に出られる様になる迄が大変で、階段は瓦礫の山で上がれない状態だったので、皆で力を合わせて瓦礫をのけました。広大(ひろだい)の校庭には、他に誰も入れない様にしてあったので、私達だけでした。お別れの時がとうとうやってきました。夕日がとても綺麗で、みんなの影が長く伸びていて印象的でした。一人一人と握手して涙ながら別れましたが、皆さん御無事に懐かしい故国にお帰りになる様にと祈りました。

オマールさんが亡くなられたのは、私が妹の疎開先の久地村に帰ってからでした。ラザックさんから久地に送られてきたハガキで知り、びっくりしました。私達と一緒にいらっしゃる時には少し熱があった様で、母が自分のハンカチを濡らしてオマールさんの額を冷やしていましたが、昼間は皆と一緒に元気に働かれ、背中に火傷があったなんてみんな知らなかったと思います。そして、夜になると私達若い者だけ集まり、笑ったり、歌ったり、そして牛田の方迄、又可部の親戚の家までにも大八車に寮の御家族を乗せて遠い道、そして真夏の暑い中を遠く迄歩かれ

て、どんなにか身体がつらかったのではないかと思う時、全く彼等の行動力には頭が下がります。もう少しで故国に帰れると思う時に動けなくなり、京都で下車され、京都の病院で手厚い看護を受けられたそうです。そして病院の院長先生から輸血を受けられ、僕と先生と兄弟になったと喜ばれたと聞き、本当に残念で仕方ありません。当時はまだ原爆症の手当も分かっていませんでした。オマールさんを故国の土をお元気で踏ませてあげたかった。御家族の方々に会わせてあげたかった。本当に残念なことです。御家族の方々もどんなにか待っていらっしゃったことでしょうか。オマールさんのお墓は京都左京区の大日山の墓地に故国の方を向いて建てられています。私も何度か行ってみました。異国に来て大変な目に遭われたのに、日本を悪く云うのでもなく、かえって私達が励まされた毎日でした。感謝以外の何物でもありません。

ニック・ユソフさんは大変な火傷と怪我で五日市方面に逃げておられ、Hさんに見つけられましたが、亡くなられました。五日市の光禅寺の墓地に埋葬され、毎年八月六日に墓前に集まり、祈りを捧げる通知を頂いていましたが、最近は身体が不自由になり、ここ数年は行っておりませんが、心の中で祈っています。

青春時代のなかった私達にとって、そして悲惨な毎日を過ごしてきた私達にとっては、本当に楽しい忘れることのできない思い出になりました。今ここにこうして命長らえているのも、Sさんに出会ったこと、留学生達の中に一緒に加えて下さったことがあったからこそだと感謝しています。現在お元気で残っていらっしゃる方はハッサンさんとユソフさんのお二人になりましたが、御健康を心よりお祈り申し上げます。赦されればもう一度再会できたらと思います。故国にお帰りになった方々は立派な要職におつきになっていると聞きました。

改めて思いますのに、日本広しといえども、私の様な経験をした者はいないと思い、この事をしっかりと心に留めたいと思います。自分の命を大切にしたいと思います。次々と亡くなられました方々のことを心よりお祈り申し

上げます。

当時、一緒に生活した留学生は次の方々です。

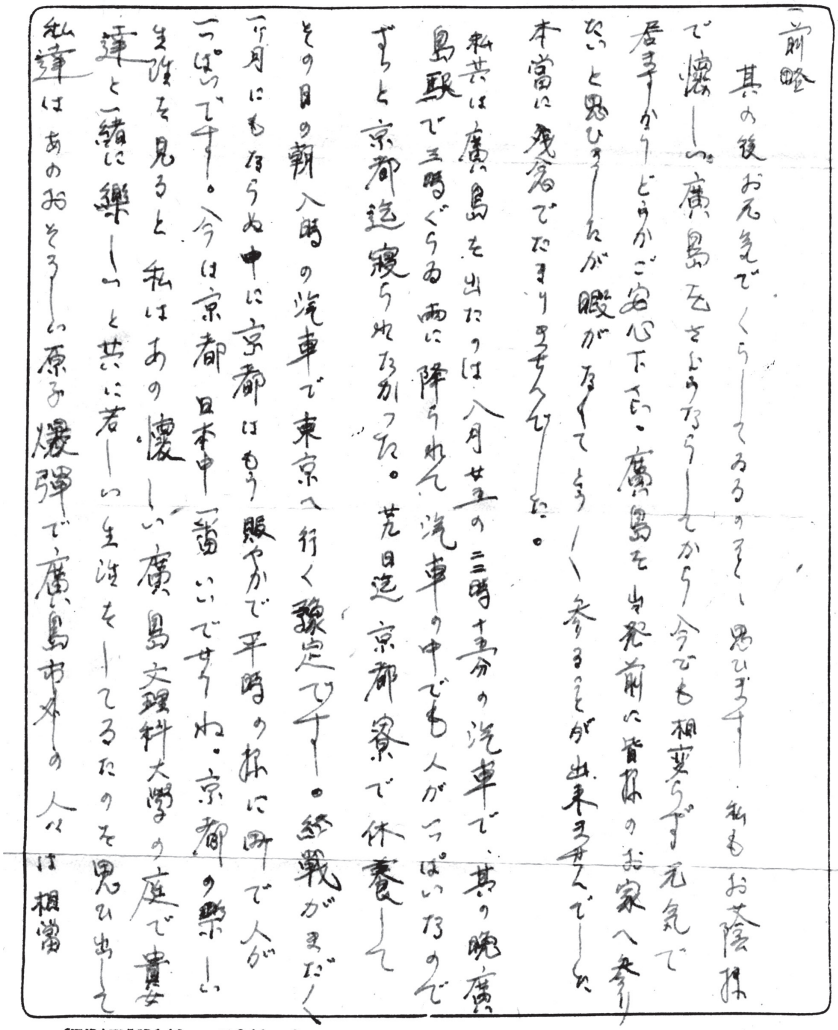
フギラン（本当はペンギラン）ユソフさん（北ボルネオ）、アディル・サガラさん（スマトラ）、ハッサン・ラハヤさん（ジャワ）、サイド・オマールさん（マライ）、アブドゥール・ラザックさん（マライ）、アリフィン・ベイさん（スマトラ）、朱定裕さん（中国）、薫永増さん（中国）。

日本人では、興南寮の持主の親子四人、Ｓさん親子、私達親子でした。

この中で今も残されているのは、ペンギラン・ユソフさん、ハッサン・ラハヤさん、私の三人だけになりました。もう一度お会いしたいと思いますが、あまりにも年を取りすぎてしまいました。

（注）この原稿は二〇一四年六月三〇日に執筆されたが、その後、校正の過程で栗原様から下記の文章が寄せられた（二〇一五年一月一九日）。

「これを書いた後にハッサン・ラハヤさんが二〇一四年一一月三〇日に亡くなられたことを知りました。広島に来られる予定になっており、お聞きした時にはとてもショックを受けました。呆然としてしまい何も手につかなくなりました。後はペンギラン・ユソフさんのみとなり一層寂しさを覚えます。ハッサン・ラハヤさん、天国でまたお会いしましょうと祈るのみです。ユソフさんどうぞお元気でいて下さい。」



（前略）

其の後お元気でくらしてゐるのでしょう思ひます。私もお蔭様で懐しい廣島をさようならしてから今でも相変らず元気で居ますからどうかご安心下さい。廣島を出発前に皆様のお家へ参りたいと思ひましたが暇がなくて失礼しました。参ることが出来ませんでしたが本當に残念でなりませんでした。

私共は廣島を出たのは八月廿五の三時十五分の汽車で、其の晩廣島駅で三時ぐらゐ雨に降られて汽車の中でも人がいっぱいなのでずっと京都迄寝られなかった。其日迄京都寮で休養して

その日の朝八時の汽車で東京へ行く豫定です。終戦がまだ一ヶ月にもならぬ中に京都はもう賑やかで平時の様に所で人が一ぱいです。今は京都日本中一番いいでせうね。京都の祭りを見ると私はあの懐しい廣島文理科大學の庭で貴女達と一緒に樂しい共に若い生活をしてゐたのを思ひ出して私達はあのおそろしい原子爆弾で廣島市外の人々は相當

（縦横A列5號148mm×210mm）

ペンギラン・ユソフ氏からの手紙①

なくなら助って私達の命だけで助ったのは誠にありがたいことだと思ひます！

そして校庭でふとんなしでかが多くてお母様と一緒に生活をしてるのは本當に懐しいことですね。

今後もどうぞお体に気をつけて大切にくらして下さいではごきげんよう!! お母様始め妹さんにもよろしく。

さようなら。

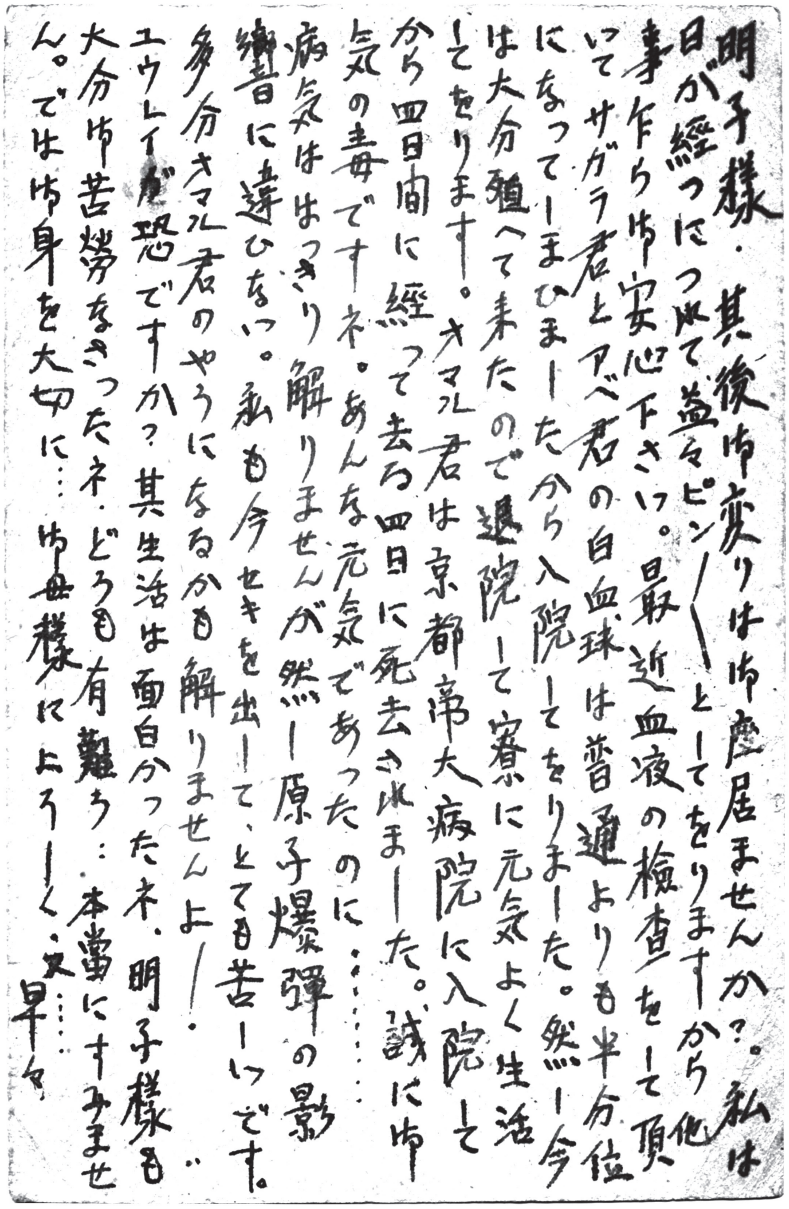
昭和廿年八月廿七日。

ペンギラン・ユソフ

〒
東京都目黒区上目黒二ノ五八五
国際学友会目黒寮内
インドネシア留学生
ペンギラン・ユソフ

（規格A判5號148mm×210mm）

ペンギラン・ユソフ氏からの手紙②



明子様・其後皆様変りは御座居ませんか？。私は日が経つにつれて益々ピン〳〵としてをります。から他事作らず安心下さい。最近血液の検査をして頂いてサガラ君とアベ君の白血球は普通よりも半分位になってしまひましたから入院してをりました。然し今は大分殖へて来たので退院して寮に元気よく生活してをります。オマル君は京都帝大病院に入院してから四日間に経って去る四日に死去されました。誠に御気の毒ですネ。あんな元気であったのに……病気はハッきり解りませんが然し原子爆弾の影響に違ひない。私も今セキを出して、とても苦しいです。多分オマル君のやうになるかも解りませんよ！。ユウレイが恐ですか？其生活は面白かったネ、明子様も大分御苦労をさったネ。どうも有難う。本当にすみません。では御身を大切に……御母様によろしく。又……早々

アブドゥル・ラザク氏からの手紙